日田市天瀬町の「まちづくりシンポジウム」

国際言語・文化学科教授
松田　美香

1 はじめに

「輝こう！あまがせ」のキャッチフレーズと共に、３月13日「魅力あふれる天瀬の創生」シンポジウムが開催された。当日、天瀬公民館には１階入り口から雛人形をはじめ色鮮やかな人形と飾り物が飾られており、その２階の会議室にて、午後１時半から５時半まで行われたシンポジウムには約60名が参加し、盛会のうちに終了した。

ちょうど２年前、天瀬公民館長の日野和則氏から電話をいただき、観光学が専門の池口功晃講師（別府大学）と一緒に公民館を訪問した。「天瀬には宝がいっぱい眠っている。若い人たちが町に刺激を与えてくれれば」と訴える日野館長の熱意と支援に励まされ、それぞれに交流や研修を約束した。それから２年が経ち、「まちづくりシンポジウム」が企画され、それらを実例として発表する機会を得ることになった。市民討議会の専門家である篠藤明徳教授（別府大学地域社会研究センター所長）を基調講演者兼司会者、池口講師、報告者が事例発表者として、シンポジウムに参加した。

結果としては、町づくりに関心を持つ天瀬町住民が多数参加してくださり、パネルディスカッション時には大学側の提案に住民が呼応し、今後の新しい展開を予感させた。特に第３部：夜の部では、さまざまな立場の天瀬町関係者が自由に語り合い、新しい取り組みに対する「踏ん切り」をつける場となったように感じられた。詳しくは、時系列に沿って以下に記すことにする。

2 基調講演と事例報告

篠藤教授の基調講演は「地方創生と日田市天瀬町」と題して、安倍内閣の政策のひとつである「地方創生」が誕生した経緯を説明することから始まった。まず、『地方消滅―東京一極集中が招く人口急減』（増田寛也編著　中公新書2014）の概要と、大分県がすでに58市町村から18市町村に合併され、日田市でも５町村が消滅して多くの町村を失っていることを指摘した。この本の内容に従えば、中核都市では大分市を反転拠点にするという結論が導き出されることになるが、これに対する反論もあると、『農山村は消滅しない』（小田切徳美著　岩波新書2014）の内容も紹介した。いわゆる「市町村消滅ショック」が、消滅するので農業をやめるという「農村たたみ論」に人工的に誘導される危険性を指摘したものである。実際にＵターンに限らず、出身地でもない小さな町村であっても、若者が多数移住する島根県の隠岐諸島にある海士町（あまちょう）の例もあることから、

巷で騒がれている「地方消滅論」を冷静に受け止めようと促し、結局のところ、「おもしろい人がいる」ことや「住民が互いに信頼し合っている」ことがその市町村が伸びていく指標になるという独自の見解を述べた。

篠藤教授が16年間住んだドイツでは国よりも市町村の歴史の方が断然長いことを住民が理解しており、コムーネ（自治体）の団結力や誇りは驚くほどである。ドイツ人である妻から、ふるさとの景観は他との比較やランキングで測りようもなく、その人にとって何よりも価値のある物であると諌められたことなどのエピソードから、日本の明治以降のシステム転換による「中央・地方」意識を相対化した。

一方、別府のまちづくりが少しずつではあるがメディアでも紹介されるようになってきた理由として、「サロン岸」「タケヤ」といった居酒屋などの「たまり場」の存在が大きいとし、そのような場がなければならないとも述べた。

最後に、昨年４月に制定された日田市の「自治基本条例」をもっとよく知り、行政と住民との協働、公民館の拠点としての役割、大学などの外の目や力のネットワーク、または若者や女性中心にまちづくりをしていく展望を述べ、これからの地域には「若者・馬鹿者・よそ者が必要」とまとめた。

事例報告として、別府大学から報告者が「天瀬で“学ぶ・遊ぶ”留学生」、池口氏が「天瀬町を舞台にした観光教育の実践」を発表した。前者は留学生の初年度日本語教育期間に行う第２次オリエンテーションとして、最近２年間、天瀬町で中学校との交流会と町民とのグラウンドゴルフ大会を行っているもので、留学生に毎回大変好評であることをアンケート結果により報告した。中学校との交流会は歌やダンスを一緒に習ったり、給食を一緒に食べたりしたが、「中学生がかわいい」「交流の時間が足りない」という意見が多く出た。また、グラウンドゴルフについては「初めてしたけれど、とても親切に教えてくれた」「楽しかった」「バラがきれいだった」（ローズヒルあまがせで実施）という意見が大半を占め、天瀬町のおもてなし度の高さを感じていることを報告し、別府大学側からは今後どのようなリアクションが必要なのかを知りたいと会場に問いかけた。

もう一つの事例報告として、池口氏の発表では観光学の授業に天瀬町視察を入れ込み、事前に学生たちは天瀬町の観光に関する知識を十分に学習し、結果、学生たちからも町民からも好評を得たことが報告された。冒頭に「観光は遊びと思われている面もあるが、人口が減少して地域が疲弊している今、交流人口を生み出すしかないところに来ている。日本だけでなく、世界中で科学的に観光の分析がなされている」と言った池口氏の言葉が印象的だった。現地を見学・観光した学生たちの感想は、「自然の豊かさと人情の温かさを感じた」「事前に勉強してきて良かった」と言うものが多かった。また、今後の天瀬町観光を良くするための提案として、「建物が古いのが気になる」「川のイベントがあると良い」「若い人向けの店がもっとあると良い」などが示された。

3 パネルディスカッション「魅力あふれるあまがせの創生」

続いて第２部として行われたパネルディスカッションでは、最近天瀬町で行われている実践例を各代表者から発表してもらい、会場とのやり取りを行った。事例発表①は小関洋一氏が「あーと☆ねっと☆あまがせ」の取り組みについて発表した。イタリア語でアルテと言えば、同業仲間または芸術という意味になるので、同様に天瀬町の商工業従事者が楽しみながらアート活動を通して町中を活性化すること、楽しみながら継続することを目

指しているそうである。実例として、「天瀬町探検マップ」の作成・配布や東京からダンスチームを招いてのコンサート等の実物・スライドでの紹介があった。

次に河野隆昌氏の「げんきby古園」の取り組みについての報告があった。10周年を迎えるチューリップ・オーナー・シップをはじめ、山里ひいな巡り、つけものカフェ、そうめん流し、グラウンドゴルフ、みそ作り、深ねぎで資金作りなど、年間を通じて住民が運営する数々の行事は地域賞を受賞するまでに育っている。しかしながら、参加者の高齢化や参加人数減少などが懸念されるとの報告だった。

その後、パネリストからの発言として、最初に斎藤義孝氏（天瀬地区自治会長会会長）の、ここ10年での人口減少、若者減少について実数を挙げて指摘し、「地域創生事業に期待」「若者の働く場所や大学の誘致をしたい」との発言があった。二人目の大庭龍一氏（日田市観光協会天瀬支部支部長）からは、クラッシックバスの「花バス」の運行や「なかべりの里」などを例に「温泉と花の里」として天瀬を売り出していることの報告があった。残念ながら「なかべりの里」が地域の賑わいの創出貢献に至っていないとの反省とその検証の必要性を語った。三人目の渡辺晃子氏（天瀬町生活研究グループ会長）からは、「あぜみち」グループとしてかりんとうの製造を19名で行っていること、祭りではうどんと椎茸飯などを提供し、故郷の味の見直しと伝承、そして「地産地消」を目標として、今日のように拡大するまでの経緯発表があった。四人目の藤原亮氏（日田地区商工会青年部天瀬支部支部長）は、素人芝居「あまがせ座」の活動やイルミネーション、昨年行ったビアガーデンが盛況だったことなどの報告があった。

その後、質疑の時間があり、今後の天瀬町をどうするべきなのかという点について、池口氏からは「観光で成功するには、若い人向けの店がポイント」という指摘があった。報告者は「たとえば、短期留学生のホームステイなどを受け入れることはできるか」という質問を投げかけ、会場では若者をどう呼び込むかを中心に話し合われた。司会の篠藤氏から「大学という建物ではなく、実質的な授業をする場として天瀬町が機能してくれれば」という提案もあり、別府大学の移動教室・実質的な学び舎としての天瀬町という共通イメージが出来上がっていった。

最後に、前々日田市長の大石昭忠氏からは「若い人から希望を感じる」、大庭氏から「留学生が来て、母国に帰って天瀬では楽しかったと報告してくれることで報われる」等の発言があった。

4 まとめと展望

第２部までで天瀬公民館を離れ、夕刻からは町内のリゾートホテル「天ヶ瀬温泉みるき～すぱサンビレッヂ」の宴会場にて第３部が行われた。日中からの参加者の他、原田市長を含めた第３部からの参加者も多く、飲みながら食べながらの歓談が続いた。さまざまな業種の方と交わり、ひとつの「天瀬」という町について語り合う場を持ったことで、報告者の中には、この町の人々に対する親近感とともに使命感も感じることとなった。

報告者は町づくりの研究者ではないし、観光の研究者でもない。町づくりや地方自治や観光についての今回の内容・今後の展望は、篠藤・池口両氏に任せるしかなく、詳しく記すことができない。しかし、今回のシンポジウムに参加したことによって、報告者の中で今まで漠然としていた町のイメージから、生き生きと活動する町民の姿が思い浮かべられるという大きな変化があった。さらに、学生を参加させるということ、極端に言えば、天瀬町界隈を若者が歩き回り人々と関わることだけでも、非常に良い効果が期待できることを理解した。今後の交流を含めた活動の方向性を掴めたことが、今回の一番の収穫だったと言える。

町づくりにはさまざまな面があり、今回のシンポジウムだけで全てを見渡せたとは言えないだろう。しかし、天瀬町の将来について「何かしなければならない」と感じる思いを共にし、語り合える場を持てたことは大変貴重であった。そういった場として機能している天瀬公民館に敬意を表し、本報告を終えることにしたい。